

自己評価規定要因の表出難易度と妥当性における 自己評価と自己意識の影響

水 間 玲 子

An Effect of Self-evaluation and Self-consciousness on the Difficulty and
the Effectiveness of Presentation about Factors of Self-evaluation

MIZUMA Reiko

問題と目的

これまでの自己概念研究では主に、表出された記述のカテゴリライゼーションや評定された項目についてのグループ化がなされ、その発達的变化や他の概念との関連などが検討されてきた。そこでの分析は、どんな自分をとらえているのかということを中心とした、いわば表現された自己の内容についてのものであった。その際、次の二つの問題点を指摘することが出来る。第一に、そこで扱われる項目が個人にとって重要なものであるか否かが考慮されていなかった点、第二に、そこで扱われる項目がいかにして表現されたかが考慮されていなかった点である。

第一の問題点は、主に方法論的な問題といえる。扱う自己がその者の内面を理解する際にどの程度有効であるかは、それが個人にとってどの程度の重要性をもつのかによって大きく異なる(水間, 印刷中)。それゆえ、個人が自分自身をいかにとらえているのみではなくて、それが個人にとって重要であるか否かという点も考慮されていくべきなのである。これについて溝上・水間(1997)、水間(印刷中)は、自己概念と自己評価とを絡めて検討していくのが適切であると述べ、有効な方法として溝上(1995; 1997)のWHY答法をあげている。WHY答法は、被験者に自己評価をさせ、それについての規定要因を自由に記述してもらう方法である。規定要因という形で自己概念を表出させるため自己概念以外の記述(例えば言い訳、人生観など)も多少みられるものの、重要な自己概念が中心的に表出されることが知られている(溝上, 1999)。

第二の問題点は主に問題意識に関わる場所である。自己概念を検討する研究では、大抵、その内容に重点がおかれていた。もちろん内容を列挙するだけでなく、肯定的な内容か否定的な内容かということの意味づけられたりするのだが、記述者の自己意識は、その内容に集約されたものとして扱われてきた。時には菊池(1970)のように記述された自己概念に対する自己評価もともに測定されることもあったが、それは少ない例である。山田(1989)はこのような動向について、自己の内容面を分析するカテゴリーだけが用いられ、記述者が自己の特性につ

いてどのように意識しているか、個人が自己の特性とどのように関わっているかなどについては十分な注意が払われていないと指摘している。また、梶田(1988)、榎本(1998)は、自己概念の把握形式自体、さまざまであることを示している。ただし、実証的研究では自己概念の把握様式があらかじめ指定されることが多かった(例えば、義務自己、理想自己、負の理想自己など)。いかに自己を対象化し、概念化し、表出するかといった自己意識の過程は個人個人によってさまざまであるのに対し、それに注目した研究は非常に少ないのである。

前述のWHY答法では、被験者全員が同じように自己評価規定要因の表出を求められる。自己評価規定要因を表出する過程はさまざまであり、WHY答法ではそれを指定していない。そして、WHY答法では自己評価の規定要因として多くは重要な自己概念が表出される。それゆえ、WHY答法によって自己を把握する際の自己意識の過程を検討していくことが可能である。

自己評価規定要因の表出に想定される個人差

人が具体的・直接的に呈示された対象物のみではなく、陳述や仮説といった抽象的な対象に対しても推理や思考ができるようになるには、Piaget(1972)のいうところの抽象的操作能力が必要である。自己の内面について具体的な対象物のように考えをめぐらせることができるようになるためにも、この能力は必要である。つまり、そもそも自己を対象化し言語化してとらえるためには、認知能力がそれなりに発達していることが求められるのである。自己概念研究において発達的な検討がなされたのも、主にこの点への関心のあらわれである(e.g. Carlson, 1965; Monge, 1973; Montemayor & Eisen, 1977)。その抽象的操作能力の獲得は、主に青年期前期あたりでなされるといわれている。

しかし、その時期以降は誰もが明確に自己を概念化できるというわけではない。Campbell(1990)はそれを“自己概念の明瞭性(clarity of self-concept)”の問題として検討している。彼は、「自己評価の高い人より低い人は自己概念が不明確で不確実である」という仮説を立て、(1)自己評価の低い人は、性格特性をあらわす形容詞リストを用いて自己描写をするにあたって、極端な評定をすることが少なく、また自分の評定に自信を持っていない、(2)自己評価の低い人は、自分の性格特性についての自己評定の安定性が低い(2ヶ月を隔てた2回の評定間の一貫性が低い)、(3)自己評価の低い人は、自己概念と自分の実際にとった行動に対する評定との間の一貫性が低い、(4)自己評価の低い人は、形容詞リストの各項目が自分に当てはまるかどうかを評定する課題の反応時間が長い、という仮説を支持する結果を得ている。Campbell(1990)では、大学生を被験者としており、前述の抽象的操作能力獲得の問題は年齢的にはクリアしているはずであった。そのように、誰もが自己をとらえることができるような段階にいなながらも、それが実際にどの程度スムーズになされるかという点には個人差が想定されるのである。

そこで、本研究ではWHY答法を用いて、自己評価規定要因の表出において、いかに自己を対象化したのかを検討していくことを目的とする。WHY答法における自己評価の規定要因表出という課題が個人にとってどの程度難しいものであったか(表出困難度)、また、表出された自己概念が自己評価の規定要因としてどの程度妥当なものだと感じられるのか(規定要因の妥当性)を表出における個人差を検討する指標として設定する。

自己評価の肯定性・否定性の影響

表出困難度および規定要因の妥当性には、自己評価による違いがみられると思われる。Campbell (1990) をふまえると、自己評価が高いの方が自己概念をしっかりとらえることができる。また、自己評価が高い者は、自己の各側面をも肯定的にみなしやすいため (Brown, 1993)、自らが表出した規定要因に対しても、肯定的な評価をしやすいであろうと思われる。加えて、WHY答法のもつ手続きは自己評価による影響を大きくすると思われる。自己評価の規定要因を表出する際には、被験者は自己へと意識を向けるのであるが、その際、肯定的自己評価をした者は自らの肯定的側面を表出することを求められ、否定的自己評価をした者は、自らの否定的側面を表出することを求められる。つまり、自己評価が肯定的であるか否定的であるかによって自らのいかなる側面に注意を向けるかは異なってくるのである。否定的自己評価をした者は否定的側面へと意識を向けざるをえないため、より多くの否定的感情を体験すると予想される。

以上より、肯定的自己評価をした者は規定要因をより容易に表出できたと感じ、その妥当性も高く評価するだろうと考えられる。一方、否定的自己評価をした者は、規定要因表出自体をより否定的にとらえると思われるため、表出の困難さをより多く感じており、また表出した内容についても否定的な評価をするだろうと考えられる。

ただしこの予測は、溝上 (1997)、水間 (印刷中) の結果と矛盾するものである。溝上 (1997)、水間 (印刷中) では自己評価の規定要因がカテゴライズされ、そのカテゴリーが自己評価との関連においていかに異なるかが検討されている。それによると、むしろ自己評価が肯定的な者の方が“言い訳”などの表出がみられ、規定要因となる自己概念を把握できていない印象を与えたのである。つまり、表出された内容を見る限りでは、自己評価が否定的な者の方がよく記述できているのである。

この矛盾は、おそらく基準が個人の内的なものであるか、外的なものであるかの違いによるものである。本研究で扱いたいのは、客観的にどうであるかということではなく、規定要因表出の過程について個人が主観的にどう感じたのかということであるため、先に述べたような見解が支持されるであろうと思われ、以下のような仮説を設定する。

仮説1：自己評価が肯定的な者は否定的な者に比べ、自己評価規定要因の表出が困難ではなかったと感じているであろう。

仮説2：自己評価が肯定的な者は否定的な者に比べ、表出された記述を自己評価規定要因としてより妥当性の高いものだと感じているであろう。

ところで、WHY答法の場合は規定要因を表出する前に自己評価を最初に求められる。そのため、自己評価が肯定的か否定的かはWHY答法の最初のステップとして二者択一的にふり分けられることが多い。そのため、いくつかの問題点を伴ってしまう。一つは、被験者の肯定性、否定性の程度まで考慮することができない点である。だがもちろん、自己評価の肯定性・否定性はその程度まで考慮された方がより詳しい検討ができ、規定要因の表出困難度および妥当性における自己評価の影響もはっきりしてくるはずである。まず肯定的自己評価の場合は、肯定性の程度が高くなればなるほど肯定性のもつ特徴は顕著になるであろうと思われる。よって、程度が高くなればなるほどより妥当性を感じられる自己評価規定要因をよりスムーズに表出でき

るようになると思われる。次に、否定的自己評価の場合であるが、単純に考えるとこの場合も否定性の程度が高くなればなるほど否定性のもつ特徴は顕著になるであろうから、否定性の程度が高い者ほど規定要因の表出をより困難だと感じ、また規定要因の妥当性を感じられないだろうと思われる。しかし否定性の程度が低い場合は、「自己評価が否定的であること」を肯定する程度も低くなるため、単純に否定的自己評価の規定要因表出が容易になるとは思われない。また自ら妥当性を感じられる規定要因を表出できるとも言いきれない。そのため、否定的自己評価の場合は程度による違いは相殺されてしまう面があると思われ、肯定的自己評価の場合ほど程度の差は顕著にみられないであろうと思われる。

そしてもう一つは、被験者がいかに自分自身を肯定あるいは否定したかという自己評価の形態を考慮することができない点である。WHY答法の回答自体が自己評価の形態についての答えになるわけであるが、自由記述であるために被験者全体を統一的に理解するのは難しい。しかしこの点も、肯定性・否定性の意味を考える上では重要になってくる。被験者全体の自己評価の形態をある程度統一的に理解する枠組みの設定がなされれば、自己評価の影響をより細かく考察していくことができる。そこで本研究では、個人がいかなる基準で自己を評価したかという基準の所在を一つの枠組みとして用いることとする。これは溝上(1999)、水間(印刷中)で詳しく検討されているが、個人が他者との優劣関係など社会的な基準で自己を評価したのか、あるいは優越などは関係なく個人の内的な基準でいわば自己受容的な感覚で自己を評価したのか(cf. Rosenberg, 1965)を区別していく試みである。本研究で検討する自己評価規定要因の表出困難度と妥当性は、個人の主観的評価によるものである。よって、社会的基準による自己評価よりも個人的基準による自己評価の方が、それらの得点に与える影響は大きいであろうと思われる。

それらを考慮した上で設定される仮説は以下のとおりである。

仮説3：自己評価が肯定的な者は、肯定性の程度が高くなればなるほど自己評価規定要因の表出をより容易だと感じているであろう。またその傾向は、個人的基準の自己評価においてより顕著であろう。

仮説4：自己評価が自己評価が肯定的な者は、肯定性の程度が高くなればなるほど自己評価規定要因の妥当性をより高く評価しているであろう。またその傾向は、個人的基準の自己評価においてより顕著であろう。

自己評価が否定的な者は、自己評価規定要因の表出困難度、妥当性、ともに否定性の程度による違いはさほど見受けられないと思われる。ただし、個人的基準の自己評価においては社会的基準による自己評価の場合よりも、否定性の程度の与える影響が何らかの形で現れるであろうと思われる。これについては仮説を設けず探索的に検討することとする。

自己意識の影響

もう一つ自己意識に影響を与えるものとして、普段の自己内省の程度があげられる。Duval & Wicklund (1972)によれば、我々が普段の生活において注意を向ける対象は自己か自己以外のもののいずれかである。そして鏡や録音テープなどによって自分の姿や声を注意の対象として呈示することによって自己への注意を高めることが出来る。そのように自己意識を高めさせ

ることによって、自己をより正確に認知することができるようになることが知られている (Gibbons, Carver, Scheier, & Hormuth, 1979; Scheier, Buss, & Buss, 1978; Turner, 1978)²¹。自己意識のあり方は、状況によって左右されるばかりでなく、その者の意識の傾向として類型的にとらえられることもある。普段から自己に目が向きやすい者とそうでない者があるということである。その場合も、同様の見解が得られている。たとえば、Turner (1978) では、被験者に自己の特性を表す形容詞を書き出すように求めると、自己意識の高い者はより多くより早く自己記述語を書き出すことができることが報告されている。

これらは、自己意識の高い者は普段から自己に関心を向けている者の方が、自己についてよく認知していることを示す。それゆえ、普段から自己に関心を向けている者は、そうでない者よりも、規定要因の表出は容易であると感じ、また、表出された規定要因の妥当性をより高く評価しているであろうと思われる。これについては、以下のような仮説を設定する。

仮説5：普段から自己意識の高い者はそうでない者よりも、自己評価規定要因の表出は容易だと感じられているであろう。

仮説6：普段から自己意識の高い者はそうでない者よりも、規定要因の妥当性をより高く評価しているであろう。

方 法

対象 関西地区の大学生2038名（男子791名，女子1241名，性別不明6名を含む）。平均年齢は19.7歳（SD=1.4）。

調査内容 ①WHY答法（溝上，1995，1997）：自己評価センテンス“私は全体的には自分自身に満足しています”を与え，“はい／そう思います”“いいえ／そうは思いません”の強制二者択一。その後，なぜ“はい”または“いいえ”と答えたのかを，5個の“それはなぜですか”に自由回答（“ただし3個以上”と付記）②規定要因の表出困難度：①について，“この質問に答えることはどの程度難しかったですか”の間。「全然難しくなかった」～「非常に難しかった」の5件法。③規定要因の妥当性：①について，“1～5で答えた理由は，あなたが今の自分に満足している／していない，をどの程度説明できたと思いますか”の間。「全く説明していない」～「大変よく説明している」の5件法。なお，これには，“注：他人にこれを読ませて理解できるかではなくて，あくまで自分の意識の中で説明しきれているかをここでは問題にしています”を付記した。④社会－個人基準，肯定性－否定性次元を考慮した自己評価尺度：溝上（1999）による。28項目（下位尺度各7項目），5件法。⑤自己意識の程度：“あなたはふだん自分のことをどのくらい考えていますか”の間。「非常によく考えている」～「まったく考えていない」の5件法。

結 果

肯定的自己評価群・否定的自己評価群の設定 WHY答法において、“はい／そう思います”と答えた者は肯定的自己評価群，“いいえ／そうは思いません”と答えた者は否定的自己評価群とした。ただし、3個以上記述がなかった者は条件に合わなかったため除外した。その上で、肯定的自己評価群の該当者は879名、否定的自己評価群の該当者は938名であった。

自己評価尺度の検討および群の設定

本研究では肯定的自己評価と否定的自己評価の程度をそれぞれ比較していくため、肯定性次元、否定性次元を分けて主因子法・バリマックス回転による因子分析をおこなった。その結果、肯定性次元、否定性次元ともに社会的基準、個人的基準の2因子で解釈することができた(Table 1, 2)。なお、肯定性次元における項目17（私は、よい点を多くもっていると思います）は、2つの因子に高く負荷していたため削除した。肯定性次元については、第一因子を個人的基準自己評価、第二因子を社会的基準自己評価、否定性次元については、第一因子を社会的基準否定的自己評価、第二因子を個人的基準否定的自己評価の因子とそれぞれ命名し、それぞれの因子に高く負荷する項目の合計得点を順に個人的基準自己評価得点、社会的基準自己評価得点、社会的基準否定的自己評価得点、個人的基準否定的自己評価得点とした。信頼性係数については、社会的基準自己評価の6項目で $\alpha = .785$ 、個人的基準自己評価の7項目で $\alpha = .846$ 、社

Table 1 自己評価尺度否定性次元の因子分析（肯定性次元）

項目内容	回転後の因子負荷量		
	I	II	h^2
8. 私は、理想通りではないが、自分というものが好きです	.757	.258	.639
12. 私は、現在の自分に満足しています	.716	.269	.585
3. 私は、現在の自分が幸福だと思えます	.684	.147	.489
15. 私は、自分自身を受け入れ認めています	.680	.255	.527
11. 私は、自分に対して非常に肯定的です	.598	.269	.430
16. 私は、自分の一つの面がだめだからといって、自分全体がだめだとは思いません	.530	.184	.315
18. 私は、たとえ人に自慢できるものがないとしても、卑屈になったりはしません	.503	-.045	.255
21. 私は、自分のことを周囲の人とは異なるすぐれた存在だと思えます	.138	.720	.537
25. 私は、いろいろな点で人より優れていると感じています	.207	.717	.557
19. 私は、自分のいろいろな能力について自信をもっています	.295	.642	.499
13. 私は、自分の知っている人々が、いつかは自分を尊敬の眼をもつてあおぎみる日がくると確信しています。	-.006	.526	.277
23. 私は、自分自身を非常に頼もしい人間だと思えます	.350	.520	.393
2. 私は、時々他の人たちからうらやましがられることがあります	.150	.420	.199
因子寄与率 (%)	24.6	19.2	43.8

Table 2 自己評価尺度否定性次元の因子分析（否定性次元）

項目内容	回転後の因子負荷量		
	I	II	h^2
1. 私は、社会のために何の役にもたない人間だと思います	.747	.086	.565
26. 何かにつけて、自分は役立たない人間だと思います	.706	.218	.546
17. 私は、自分が無力だと思っています	.664	.217	.488
24. 自分には、自慢できるところがあまりありません	.541	.211	.337
28. 私は、敗北者だと思うことがよくあります	.462	.356	.340
27. まわりの人は、みんな私より立派な人です	.370	.127	.153
22. 私は、いつも人から侮辱されているように感じます	-.263	-.155	.093
6. 私は、時々自分自身が嫌になるときがあります	.240	.713	.566
9. 日によって、自分自身を好きになったり、嫌いになったりします	.030	.596	.356
20. 私は、自分自身の中に変えたい部分がたくさんあります	.260	.595	.421
4. 私は、今のままの自分ではいけないと思うことがあります	.253	.589	.411
7. 私は、自分自身を非常によく責めるたちです	.332	.509	.369
10. 今の私ははがゆくて仕方ありません	.362	.488	.369
14. 私は、自分自身についての見方がころころ変わります	.141	.460	.231
因子寄与率 (%)	19.0	18.5	37.5

会的基準否定的自己評価の7項目で $\alpha = .794$ 、個人的基準否定的自己評価の7項目で $\alpha = .797$ であった。社会的自己評価および個人的自己評価は肯定性の程度、社会的基準否定的自己評価および個人的基準否定的自己評価は否定性の程度の測度とする。

肯定性の程度が検討されるのは肯定的自己評価群、否定性の程度が検討されるのは否定的自己評価群である。肯定的自己評価群のみでの社会的基準自己評価得点、個人的基準自己評価得点の平均値と標準偏差は順に、17.5点 ($SD=4.0$)、28.1点 ($SD=3.5$) であった。そして、社会的基準自己評価得点の上位30%に属する者(20点以上)を高群、下位30%に属する者(15点以下)を低群とし、その間に属する者(16点~19点)を中群とした。個人的基準自己評価得点も同様に、上位30%(31点以上)を高群、下位30%(26点以下)を低群とし、その間(27~30点)を中群とした。否定的自己評価群のみでの社会的基準否定的自己評価得点と個人的基準否定的自己評価得点における平均値と標準偏差はそれぞれ順に20.5点 ($SD=4.9$)、26.9点 ($SD=4.2$) であった。そして、社会的基準否定的自己評価得点の上位30%(24点以上)を高群、下位30%(17点以下)を低群とし、その間に属する者(18~23点)を中群とした。個人的基準自己評価得点も同様に、上位30%(30点以上)を高群、下位30%(24点以下)を低群とし、その間(25~29点)を中群とした。

自己意識の程度 自分のことを考えているかどうかについては、平均得点4.0 ($SD=0.8$) 点と、高得点への偏りが見られた。誰しも普通の生活で自分自身のことに思いをめぐらす機会はあるだろうから、自分について考えているかと問われれば大抵の者は考えていると答えるのであろう。そこで、“非常によく考えている”と自己意識の高さを強く肯定した者のみ自己意識高

群とした。また、この質問に対して“考えてない”とあえて答えた者は、普段よほど自己意識が低いのだとみなしてよいであろうから、自己意識低群には、“まったく考えていない”のみならず、“あまり考えていない”と回答した者も含めることとした。“まあまあ考えている”および“何とも言えない”と答えた者は中群とした。それぞれの群に該当する人数は、自己意識高群568名、中群1301名、低群160名であった。

規定要因の表出困難度と自己評価

表出困難度については、まず、肯定的自己評価群の規定要因の場合と否定的自己評価の規定要因の場合との比較検討を行った。表出困難度の平均得点は、3.3点 ($SD=1.2$) であった。肯定的自己評価群 ($n=867$) の平均値は3.4 ($SD=1.3$) 点、否定的自己評価群 ($n=930$) の平均値は3.3 ($SD=1.3$) 点であった。各群を独立変数、表出困難度を従属変数としたとした一要因分散分析を行ったところ、有意差・群間差は見られず、仮説1は支持されなかった。

規定要因の妥当性と自己評価

規定要因の妥当性の平均得点は、3.1点 ($SD=0.9$) であった。妥当性についても、まず、肯定的自己評価の規定要因の場合と否定的自己評価の規定要因の場合との比較検討を行った。肯定的自己評価群 ($n=865$) と否定的自己評価群 ($n=927$) を独立変数、規定要因の妥当性を従属変数とした一要因分散分析を行ったところ、肯定的自己評価群の平均得点は3.2 ($SD=0.9$) 点、否定的自己評価群の平均得点は3.0 ($SD=0.9$) 点であり、肯定的自己評価群の方が否定的自己評価群よりも有意に高い得点を示していた ($F_{(1,1790)}=18.316, p<.01$)。これにより、仮説2は支持されたといえる。

規定要因の表出困難度と肯定性・否定性の程度

肯定的自己評価群、否定的自己評価群それぞれの規定要因の表出困難度が、肯定性・否定性の程度によっていかに異なるかを検討した。まず肯定的自己評価群において、社会的基準自己評価得点を独立変数とし、表出困難度を従属変数とした一要因分散分析を行ったところ、社会的基準自己評価による有意な主効果がみられた ($F_{(2,889)}=9.47, p<.01$)。平均値はそれぞれ、高群 ($n=274$) 3.1点、中群 ($n=317$) 3.4点、低群 ($n=271$) 3.5点であった。群間差は、高群<中群<低群において有意であった ($p<0.5$)。個人的基準自己評価得点を独立変数とし、表出困難度を従属変数とした一要因分散分析を行った場合も、個人的自己評価基準による主効果および群間差ともに有意な効果がみられた ($F_{(2,888)}=21.13, p<.01$)。平均値はそれぞれ高群 ($n=234$) 3.1点、中群 ($n=351$) 3.3点、低群 ($n=276$) 3.6点であった。群間差は、高群<中群<低群において有意であった ($p<.05$)。群間での得点の変動は社会的基準自己評価の場合よりも個人的基準自己評価の場合の方が大きく、また、表出困難度との間における相関係数も個人的基準自己評価の方がやや高い値を示した (社会的基準自己評価は $r=-.148, p<.01$ 、個人基準自己評価は $r=-.205, p<.01$)。これにより、仮説3は支持された。

否定的自己評価群においても程度による違いを検討した。否定的自己評価群において、社会的基準否定的自己評価得点を独立変数とし、表出困難度を従属変数とした一要因分散分析を行ったところ、社会的基準否定的自己評価による有意な主効果がみられた ($F_{(2,911)}=6.11, p<.01$)。平均値はそれぞれ、高群 ($n=240$) 3.0点、中群 ($n=415$) 3.3点、低群 ($n=259$) 3.4点であっ

た。群間差は、高群<中群、高群<低群において有意であった ($p<.05$)。個人的基準否定的自己評価を独立変数とし、表出困難度を従属変数とした一要因分散分析においても、個人的基準否定的自己評価による有意な主効果がみられた ($F_{(2,915)}=5.51, p<.01$)。平均値はそれぞれ、高群 ($n=264$) 3.1点、中群 ($n=419$) 3.2点、低群 ($n=235$) 3.4点であった。群間差は、高群<低群、中群<低群において有意であった ($p<.05$)。社会基準否定的自己評価、個人的基準否定的自己評価と表出困難度との相関係数はそれぞれ $r=-.101$ ($p<.01$)、 $r=-.098$ ($p<.01$) であった。

規定要因の妥当性と肯定性・否定性の程度

肯定的自己評価群、否定的自己評価群それぞれの妥当性が、肯定性・否定性の程度によっていかに異なるかを検討した。まず肯定的自己評価群において、社会的基準自己評価得点を独立変数、妥当性を従属変数とした一要因分散分析を行ったところ、社会的基準自己評価による有意な主効果がみられた ($F_{(2,887)}=10.62, p<.01$)。平均値はそれぞれ、高群 ($n=272$) 3.4点、中群 ($n=318$) 3.1点、低群 ($n=270$) 3.0点であった。群間差は、高群>中群、高群>低群において有意であった ($p<.05$)。個人的基準自己評価を独立変数とし、妥当性を従属変数とした一要因分散分析においては、個人的基準自己評価による有意な主効果がみられた ($F_{(2,886)}=29.92, p<.01$)。平均値はそれぞれ、高群 ($n=235$) 3.5点、中群 ($n=352$) 3.1点、低群 ($n=272$) 2.9点であった。群間差は高群<中群<低群において有意であった ($p<.05$)。また、社会的自己評価よりも個人的基準自己評価において、群間での得点の変動はより大きく、妥当性との間における相関係数も個人的基準自己評価の方が高い値であった (社会的基準自己評価 $r=.156, p<.01$ 、個人的基準自己評価 $r=.271, p<.01$)。これにより、仮説4は支持された。

否定的自己評価群においても程度による違いを検討した。まず社会的基準否定的自己評価得点を独立変数、妥当性を従属変数とした一要因分散分析を行ったところ、社会的基準自己評価による有意な主効果はみられなかった。社会的基準否定的自己評価の各群における妥当性の平均得点は、高群3.0点、中群2.9点、低群3.1点であった。個人的基準自己評価得点を独立変数、妥当性を従属変数とした一要因分散分析を行った場合も、個人的基準自己評価による有意な主効果はみられなかった。個人的基準否定的自己評価の各群における妥当性の平均得点は、高群3.0点、中群3.0点、低群3.0点であった。いずれの自己評価得点も、妥当性との間の相関係数は有意ではなかった。

規定要因の表出困難度と自己意識

表出困難度について、自己意識の程度を検討するため、自己意識の程度における得点の違いを検討した。自己意識の高低による群を独立変数、表出困難度を従属変数とした一要因分散分析を行ったところ、自己意識の程度による有意な主効果がみられた ($F_{(2,1983)}=22.02, p<.01$)。平均値はそれぞれ、高群 ($n=559$) 3.0点、中群 ($n=1273$) 3.4点、低群 ($n=154$) 3.6点であった。群間差は、高群>中群、高群>低群において有意であった ($p<.05$)。これより、普段から自己について考えていない者は考えているものよりも規定要因の表出を困難だと感じており、仮説5は支持されたといえる。

規定要因の妥当性と自己意識

規定要因の妥当性の評価についても同様に、自己意識の程度による得点の違いを検討した。自己意識の高低を独立変数、妥当性を従属変数とした一要因分散分析を行ったところ、自己意識の程度による有意な主効果がみられた ($F_{(2,1999)}=29.45, p<.01$)。平均値はそれぞれ、高群 ($n=554$) 3.3点、中群 ($n=1267$) 2.9点、低群 ($n=151$) 2.9点であった。群間差は、高群>中群、高群>低群において有意であった ($p<.05$)。これより、普段から自己について考えていない者は考えているものよりも自らが表出した規定要因の妥当性を高く評価していることがうかがえ、仮説6は支持されたといえる。

考 察

本研究では肯定的自己評価をしている者の自己概念の明瞭性に注目し、仮説1および仮説2を立てたわけであるが、仮説1は支持されなかった。従来、自己評価規定要因の内容をみる限りでは、否定的自己評価の規定要因の方が肯定的自己評価の規定要因よりも多く表出されることが明らかにされており、肯定的自己評価の規定要因の表出は否定的自己評価の規定要因の場合よりも困難であろうことが示唆されてきた(溝上, 1997; 水間, 印刷中)。本研究では被験者の主観を測定することを目的としていたが、肯定的自己評価群においては、記述に反映されるような肯定的自己評価規定要因の困難さを被験者自身が感じたところもあったのであろう。また、否定的自己評価群は、否定的自己評価の規定要因を多く表出できることを被験者自身が感じたところもあったのであろう。それゆえ、肯定的自己評価群・否定的自己評価群それぞれのもつ、表出を容易にする要因および困難にする要因がともにはたらき、両群間には差がみられなかったのではないかと考えられた。

ただ、肯定性・否定性の程度を考慮した分析の際には、肯定的自己評価群においてはその肯定性の程度が高い者の方が困難度は低かった。ここから、同じく肯定的自己評価規定要因を表出するという条件下におかれた場合には、自己評価がより肯定的な者の方がより容易に自己評価規定要因を表出できると感じていることがうかがえた。また、否定的自己評価群においては否定性の程度が低くなるほど表出を困難だと感じていたようであった。ここからは、否定的自己評価規定要因を表出する場合には単に否定性が強くなれば表出が難しくなるとは考えられず、むしろ否定性が個人内でより強く肯定される方が表出が容易に感じられるようであることが明らかにされた。否定性次元は肯定性次元の単なる対ではないことはさかんに指摘されているが、ここでもその見解を支持する結果がえられたといえるであろう。

自らが記述した内容が自己評価を十分に説明するものであるか否かといった記述の妥当性という指標においては、肯定的自己評価群の方が否定的自己評価群よりも有意に高く、自らの記述にある程度満足しているようであることがうかがえた。そこに記述された内容がいかなるものであれ、自らが自己について十分に記述できたと思えばこの得点は高くなるため、肯定的自己評価群は、自己を把握できているという感覚がもっているのではないかと考えられた。

肯定性、否定性の程度を考慮した分析においては、肯定的自己評価群についてはやはり肯定

性の程度の高い者の方が有効性をより高く評価しており、自己肯定の程度が記述の有効性を高く評価させているようであることが示された。否定的自己評価群においては有意差がみられず、否定性次元は単に程度の高低によって質が分化されるわけではないのではないかと考えられた。

自己意識の程度を考慮した分析からは、調査において自己に関する質問がなされる場合には、普段の自己内省の程度などによって記述のしやすさや本人が記述に対して感じる妥当性は異なってくるということが明らかにされた。質問紙調査などで自己記述を求められる際には被験者全員が自己に向き合うことを要請される。すなわち、研究者によって自己対象化を促されるのである。それゆえ、その時点では誰もが一定程度自己意識を高められるわけである。ただし、その際にどの程度被験者自身がどの程度スムーズに妥当性を感じられる回答ができていたのかには、普段どの程度自己に目を向けているか、すなわち他者によらずとも、自分自身によって普段どの程度自己対象化が促されているのかによっても異なってくるようであった。

まとめと今後の課題

本研究では、WHY答法という自己評価の規定要因を問う調査法において、被験者の記述がどのような自己意識によるものであるかを検討するために、WHY答法への回答がどの程度難しいものであったか、また、記述した規定要因がどの程度自己評価の理由を説明するものであるかという“表出困難度”および“妥当性”の2点に注目して検討を行った。その際、それらに影響を与えるとして設定した変数は自己評価と自己意識の程度であった。

自己評価の影響については、WHY答法での肯定的自己評価群と否定的自己評価群という区分をベースに肯定的自己評価、否定的自己評価とを大きく二分した。その際には、妥当性においてのみ、肯定的自己評価の者が高い得点を示しており、調査に対してどの程度十分に記述ができたかという感覚は、肯定的自己評価をしている者においてより強いようであることが明らかにされた。これまで溝上(1997)、水間(印刷中)においては、肯定的自己評価の規定要因には否定的自己評価の場合と比べて自己の記述が十分にみられなかったり、さほど要因の説明になっていないような記述が多くなることが指摘されていたが、被験者自身の内観においては、肯定的自己評価の者は否定的自己評価の者よりも、ある程度要因として有効な記述ができたと感じているようであった。これは、内容にいかなるものがあらわれるのかということと、書いた本人がその記述をいかにとらえているのかにある程度のギャップがあることを示唆する。

なお、否定的自己評価群すなわち否定的評価をした者がさまざまな要因を記述できるにもかかわらず、妥当性が低かったことについては、多くの要因をとらえすぎて書ききれないのか、それとも、いかなるものを記述しようとも不十分に感じられるのか、単に自己の行動を否定的に評価しただけなのか、さまざまな自己意識の様相が想定される。この点については今後のさらなる検討がのぞまれる。

自己評価の程度を考慮した分析からは、否定的自己評価の場合、その程度による違いは肯定的自己評価の場合ほど顕著ではなかった。肯定的自己評価をした者において肯定性が高くなっていく場合と、否定的自己評価をした者において否定性が高くなっていく場合とは決して対称

的にはとらえられないようであると思われた。

自己意識の程度を考慮した分析からは、調査においては同じように自己について記述を求められているとはいえ条件がまったく同じとはいえず、普段の内省の程度などがその記述の困難度や妥当性に影響を与えるようであることが明らかにされた。この自己意識の程度は、個人の自己概念の把握様式などにも大きな影響を与えると思われる。普段の内省態度が反映されやすい形で個人の自己意識を検討していくことで、自己概念の把握様式の個人差はより顕著にあらわれるのではないかと思われ、方法論の模索も今後求められるところである。

本研究は、冒頭で述べたさまざまな自己概念の把握様式を検討したというよりは、それを検討していく前段階のものとして位置づくものである。今後は、具体的にいかなる様式で自己を把握しているかといった問題がとりくまれていくべきである。内容として示されるものとそれを支える自己意識との関連を明らかにしていくことが、今後の大きな課題である。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、京都大学大学院子安増生教授に丁寧な指導をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

注

1. この自己意識理論 (self-consciousness theory) では、自己意識は、身体や行動など、他者からも観察可能な自己の領域について向けられる公的自己意識 (public self-consciousness) と、他者からは見えない、自己の内的な領域について向けられる私的自己意識 (private self-consciousness) とに分かれると考えられている。ここでは、主に私的自己意識についての見解をふまえている。

引用文献

- Campbell, J.D. 1990 Self-esteem and clarity of the self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 538-549.
- Carlson, R. 1965 Stability and change in the adolescent's self-image. *Child Development*, 36, 659-666.
- 榎本博明 1998 「自己」の心理学—自分探しへの誘い— サイエンス社
- Gibbons, F.X., Carver, C.S., Scheier, M.F., & Hormuth, S.E. 1979 Self-focused attention and the placebo effect: Fooling some of the people some of the time. *Journal of Experimental Social Psychology*, 15, 263-274.
- 梶田毅一 1988 自己意識の心理学 [第2版] 東京大学出版会
- 菊池登紀子 1970 青年期における自己観 (1) —私立女子校生における発達の様相— 岩手大学教育学部年報, 30, 57-76.
- 溝上慎一 1995 WHY答法による将来の生き方基底因 心理学研究, 66, 367-372.
- 溝上慎一 1997 自己評価の規定要因とSELF-ESTEEMとの関係—個性記述的観点を考慮する方法としての外在的視点・内在的視点の関係— 教育心理学研究, 45, 62-70.
- 溝上慎一 1999 自己の基礎理論—心理学の実証的パラダイム— 金子書房
- 溝上慎一・水間玲子 1997 「自我—自己」からみた青年心理学研究—意義と問題点, 今後の課題— 京都大学高教育研究, 3, 25-45.
- 水間玲子 印刷中 肯定的および否定的自己評価の規定要因の特徴 —個人にとっての重要な領域を探る試みとして— 梶田毅一編『自己意識研究の現在』ナカニシヤ出版

水間：自己評価規定要因の表出難易度と妥当性における自己評価と自己意識の影響

- Monge, R.H. 1973 Developmental trends in factors of adolescent self-concept. *Developmental Psychology*, 8, 382-393.
- Montemayor, R. & Eisen, M. 1977 The Development of self-conceptions from childhood to adolescence. *Developmental Psychology*, 13, 314-319.
- Piaget, J. 1972 *Problems de Psychologie Génétique*. Denoël-Gontheier. (芳賀純訳『発生的心理学—子どもの発達の場合—』誠信書房, 1975)
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- Scheier, M. F., Buss, A. H., & Buss, D.M. 1978 Self-consciousness, self-report of aggressiveness, and aggression. *Journal of Research in Personality*, 12, 133-140.
- Turner, R. G. 1978 Self-consciousness and speed of processing self-relevant information. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 456-460.
- 山田ゆかり 1989 青年期における自己概念の形成過程に関する研究—20答法での自己記述を手がかりとして— *心理学研究*, 60, 245-252.

(博士後期課程3回生, 教育心理学講座)